



連続セミナー「知の変容と大学図書館」第5回

「ポスト人文書空間において、学術出版はいかに可能か——

「出版」再定義への試み」参加報告

福井 京子

連続セミナー「知の変容と大学図書館」の最終回は、明治学院大学文学部芸術学科芸術メディア系系列准教授の長谷川一氏を講師にお迎えした。

『論座』2007年3月号（通巻142号）の特集『「人文書」の復興を！』のタイトル説明に次のように書いてあった。

「人文書」とは何だろうか？それ自体が実は難問なのだが、今はさしあたり、文学・哲学・歴史・社会科学などに分類される書物をイメージしてみよう。「出版不況」と言われて久しいが、そうした本は特に不況の影響を強く受けているという。この「危機」ともいえる状況下で、「人文書」はどのようなかたちで生き残ることができるのだろうか。

メディア論的視座として人文系の学問は、書物という物質的形態や、その生産・流通形態と不可分の関係にある。とりわけ20世紀の日本にあって、「人文書」という言葉は、たんに出版物の一分野をさすのではなく、ひとつの象徴として機能していた。そのような社会的構造を、氏は「人文書空間」とよぶ。しかしこの「人文書空間」は、高等教育の大衆化する時期以降に衰退することになった。出版と知が変容したのである。今日、学術情報流通の多様化とデジタル化により、出版の意味が問い直されている。人文系の学術出版はどのように再構築されるべきなのか。以下の1～4にわたって展開された。

1、なぜ、どのように、人文書が問題なのか？

人文書というステータスが崩れ、人文書が危機なのである。

人文書とは、人文学の書物、専門書、読み物など語る人によってさまざまであり、たんなるジャンルに還元できないものである。ある種の価値の象徴であり、その中で共有される書物が近代日本の出版空間の主軸であった。また、知識人と大衆を媒介し、形成、駆動を可能にした社会的配置でもあった。その出版が危機なのである。

(次頁へ)

[目次]

連続セミナー「知の変容と大学図書館」第5回 「ポスト人文書空間において、学術出版はいかに可能か——「出版」再定義への試み」参加報告	… 1
大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」のまとめ	… 3
グルジア旅行記・・・あれ、図書館は？	… 5

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm

人文書出版を企業活動として継続することは困難な時代になってきた。それは人文書の読者の高齢化、不在化によるものである。ただし読者一般の不在化ではない。学術情報流通の多様化や変容によって人文書とそれ以外の区別がぼやけてきた。出版がやっていけなくなってきた。

さらに知が危機なのである。知の質が変化した。「廃墟の中の大学」という言葉であらわされるように大学という機関の変質があげられる。誰もが知っている、読むべき尊敬すべき知識人の消滅、知をめぐる社会構造の変質なのである。実学への傾斜、知識の実学化、教養から情報へというように人文的な知あるいは教養の地盤沈下、つまり高等教育の大衆化がそうさせたのである。

2、ポスト人文書時代とその課題

人文書が崩壊した現在を、氏はポスト人文書時代という。

「人文書空間」の地層とは、近代型社会の形成期、日本型教養主義、農村型社会という背景、高等教育の希少性、ナショナルな出版空間、啓蒙と消費の同根性であったが、その「人文書空間」が崩壊した。それは以下の理由からである。

- 1) 知識人と大衆とをわけていた構図が消滅してしまったこと＝日本型教養主義の無効化。
- 2) 学問による社会階層移動という構図が消滅してしまったこと＝都市型社会への転換。
- 3) 社会の断片化と格差が生じた啓蒙主義の帰結としての消費社会化。
- 4) 高等教育のマス化及び商業化
- 5) ナショナルな出版空間の境界の溶解

ポスト人文書時代の大学は、全入時代である。一方は世界一流をめざし、もう一方は就活予備校のように二極化している。また知である出版物は知の実用化、消費財（ネタ）化、例えばノウハウ、新書、検索資源などとなっている。これまでの発想・方法では、もはや人文的な知を捉えきることができない。

このような中で、課題は人文書という視点から出版 Publishing の概念を再構築していくことである。

3、出版の再定義に向けて——いくつかの試み

Publishing から PUBLICing へ出版を探り直す。つまり出版を出版社が担うものだけではなく、われわれが日常行っている、書く、編む、形にする、手渡す、受け取る、読むなどの循環へ仕立て直していくことが氏のいう PUBLICing である。

4、大学図書館への期待

大学図書館の本来の業務、資料の収集、整理、提供などは従来行われているものである。その業務にとどまることなく、図書館は主体的に情報を編集、発信する、あるいは異なる領域の人たちの出会う機会の提供の場になりうるはずである。そのようなことを可能にするリソースとポジションが大学図書館にあるのではないか。

5、まとめ

ポスト人文書時代の人文書出版は与えられるのではなく、みずからつくっていかねばならない。また従来の出版を読み替えていくこと、協働的な活動をとおして知にかかわる新たな公共的価値をつくりだすことである。

以上が参加報告である。氏は次のような授業を行っている。Publishing から PUBLICing では、学生たちに授業の課題として「日本の出版」を寸劇で表現すること、また本づくりでは、比喩的表現ではなく文字どおり、制作すること、たとえば携帯小説なら携帯の形に本を実装する。そして制作した受講本をもう一冊作って誰かに手渡す、受け取った相手の反応をレポートにまとめさせる。その学生たちのレポート報告に、本をつくって読んでもらう立場にたって、今まで考えもしなかった考えが浮かんできたとあるが、これは氏の言う「もう一度人文書なる観念を捉えかえしていくことこそ、人文書を問うことになるはずだ」と言う言葉をあらわしていると思う。

最後にご講演くださった長谷川一先生、このような連続セミナーを企画・運営された支部委員の方々に感謝申し上げます。

長谷川一先生の主な著書

『出版と知のメディア論』みすず書房、2003年、日本出版学会賞奨励賞

『メディア・プラクティス』共著、水越伸・吉見俊哉編、せりか書房、2003年

『メディアリテラシーの工具箱』共著、東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編、東京大学出版会、2005年

ふくい けいこ (京都大学大学院教育学研究科・教育学部図書室)

¹長谷川一「パブリッキング PUBLICing としての出版「人文書空間」崩壊以後」『論座』通巻142号, pp55, 2007.

大図研京都連続セミナー「知の変容と大学図書館」のまとめ

京都支部 支部委員会

「デジタル化、ネットワーク化、オープンアクセス、大学全入時代、大学法人化 etc... 社会の急激な変化は、大学図書館のみならず、大学や出版、さらには「知」のあり方に変化を迫ろうとしているのではないのでしょうか」今回の京都連続セミナーは、こうした問いかけから始まりました。初回では、竹内先生が「大学」と「知」を巡る状況の変化を語られました。続く第2回、第3回で、北先生は、「web2.0」という言葉に象徴される図書館にも関わるテクノロジーの変化、また、渡邊先生は、図書館の中心をなしてきた「目録」のあり方の変化を提示されました。そして最終回、「出版」の視点からこれからの「知」の姿を取り上げた長谷川先生の講演により、「変化」をキーワードに、大学図書館の方向性を問うたセミナーのテーマの円環が巡りました。また、公募によった「ライブラリアン・セッション」は、図書館員自身が各自の問題意識から、図書館と図書館員のあり方を問う内容でした。

ついで、会場で参加者の皆さまからいただいたアンケートの回答結果をご報告しながら、連続セミナーのまとめとさせていただきます。

○各回の内容は、次のとおりです。

第1回 2007年6月3日(日) 竹内洋先生(関西大学)「大学の変貌」

第2回 2007年7月15日(日) 北克一先生(大阪市立大学)「Web2.0時代の大学図書館」

第3回 2007年9月16日(日) 渡邊隆弘先生(帝塚山学院大学)「目録サービスの進むべき道」

第4回 2007年10月7日(日) ライブラリアン・セッション

福井京子「いま求められる図書館員：コンシェルジュの図書館員」／土出郁子「闘病記」資料群の性格と愛媛大学における事例」／坂本拓「私たちが図書館員でなくなる時：危機管理の視点から」／呑海沙織「図書館員養成におけるメンター制度」／大綱浩一「大図研京都支部 Web サイトの紹介」

第5回 2007年11月11日(日) 長谷川一先生(明治学院大学)「ポスト人文書空間において、学術出版はいかに可能か：「出版」再定義への試み」

○広報について

今セミナーは、全回を通して、123名と多数のご参加をいただきました。開催情報は、多くの方が、メーリングリストを通して、ついで支部サイトから得られていました。京都支部では、これらの媒体とともに、支部報などにより、会員の皆さまに企画のお知らせをしていきますので、どうぞ注目ください。

○会場について

すべて京都駅前のキャンパスプラザ京都で行いました。とくに立地のよさによるものと思われませんが、ご好評をいただいています。

○開催日・時間設定・会費について

全回、日曜日に開催しました。支部企画は、多くの方が大学図書館にお勤めということで、通常週末の開催となりますが、開催曜日（土もしくは日）についてのご希望は、拮抗するものでした。開始時間（13時半）は、適当とのご意見を多くいただいています。

また、セミナーでは講演の時間と同程度の質疑応答の時間をご用意して、活発な意見交換を期しました。この時間配分にも、回によって若干の差はありますが、ご好評をいただいています。なお、セミナー終了後の懇親会では、毎回、講師の先生を囲んで、和やかながらも活発な意見交換が行われました。

会費については、第4回を除いていただきましたが、設定した額は概ね、妥当とのご意見をいただいています。

最後に、アンケートにご記入いただいた感想の一部をご紹介します。なお、参加者にご寄稿いただいた報告は、「京都支部報」（No.259-262）および「大学の図書館」（26(7),26(9),26(11),27(1)）にも掲載されていますので、併せてご覧ください。

第1回

- ・大学についての歴史的な流れをふまえてお話くださってよかったです。教養については、いくらメジャーでなくなっても大学と切り離しはいけないと思いました
- ・教育制度の歴史、外国との比較等興味深い内容でした。
- ・大変興味深かったです。所属大学の学生の知のあり方にもっと意識的にならなければならないと感じました

第2回

- ・利用者の検索行動と図書館が行っているサービス(OPAC、レファレンス)のちぐはぐさがあまりに的をえていて面白かったです。全体的に図書館への皮肉(批判?)がちりばめられていて良かったです。
- ・名前しか知らない web2.0 のイメージはわかったが専門的な用語は 90 分では理解できなかった。

第3回

- ・著者名・件名をもっと大事にしていこうという意見に共感もてました。今の大学図書館員が専門職になりきれないのは、ここを重視してこなかったためではないかと考えています。
- ・目録サービスの動向を知るには大変ためになった。実務への取り入れをどう意識するか考えたい。
- ・目録業務を担当していた時には、忙しさにかまけていろんな疑問・不満に目をつむってきました。今日の講演で、みんなが色々動いているんだ（まだまだ先は長そうだけど）、と

ということが実感できて、今後が楽しみにになりました。

第4回

- ・ コンシェルジェの着眼点はおもしろい。
- ・ 闘病記の資料という、手に入りにくいのが、利用が困難な資料を有効活用しておられ感心いたしました。
- ・ 倫理基準が「誰によって」シフトし得るのか、ということを見ると（大衆とか検閲とかマスコミとか）その中で「図書館の自由」（今あるもの）を守っていくのはやはり難しいというか、図書館の自由自体が変化し得る可能性は十分あると思いました。
- ・ メンター制、日本の大学でも可能かどうか考えてみたい。
- ・ 仕事で、図書館のHP構築・メンテナンスを担当しているので、とても参考になりました。「デザインに求められるもの」の図がすごくわかり易いです。Likability（かっこよさ）という概念を初めて知りましたが面白い……。

第5回

- ・ 図書館の仕事の一部が、編集とまったく同じ活動だというお話は新鮮でした。
- ・ 出版とは？という大きなテーマでしたが、歴史や流通、作り手など様々な切り口で語っていただき、自分でも考えを深めるきっかけとなりました。
- ・ たいへん真摯なお話をおうかがいできて、よかったです。編集者、教育者、研究者と図書館員をむすぶ輪ができればいいと思いました。

京都支部では、今後もセミナー等の企画を行っていきます。取り上げるテーマについてのご意見やご希望、そして何より、京都支部会員の皆さまのたくさんのご参加をお待ちしております。

(赤澤 記)

グルジア旅行記・・・あれ、図書館は？

坂本 拓

【グルジア・・・】

ってご存知ですか？国の名前です。旧ソ連の一部で、トルコの右隣、ヨーロッパとアジアの境目のコーカサス山脈の麓にあります。そのため、アジア、ヨーロッパ、中東の様々な文化が交じり合い、独特の美しい様式が、生活・芸術の随所に見受けられます。しかしその反面、やはり多くの民族問題を抱えており、治安は決して良いとは言えません。外務省発信の2007年9月の安全情報では、グルジア全土はレベル1の危険地域に指定されていて、その中でも民族問題を抱えるいくつかの地域とその周辺は、レベル3の危険地域に指定されていました。ちなみにレベル3とは、イラク北部と同程度の危険レベルです。・・・なぜ、そんな国に行くの？私が夏休みにグルジアを旅すると言った時、友人たちは、例外なくこのように訊いてきました。・・・自分でも良くわかりません。とりあえず、世界最古の歴史を持つグルジア・ワインがベラボーに美味しいと聴いていたのと、コーカサスの山を見たかった、というのはありますが、ワインなら日本でも扱っているインポーターがありますし、コーカサスももっと安全なアルメニアかアゼルバイジャンでも見れます。まあ、B型特有の変な思いつき、というヤツでしょうか。でも結局無事に楽しく旅を終えることができたので、結果オーライということで。

[トルコにて]

日程としては、9月3日の夜中に関空を発ち、9月4日の朝から夜までトルコをぶらついた後、9月5日の早朝にグルジアに入り7日間うろちよろする、というものでした。乗り継ぎで立ち寄ったトルコも非常に魅力のある国で、語りたことは山ほどあるのですが、紙幅に限りがあるので、1点だけにとどめます。

キリム、ってご存知ですか？トルコ独自の絨毯のような織物です。往路でトルコに立ち寄った際にたまたま知り合った、ベキムという私と同年の青年がこのキリムの商店を営んでおり、彼からキリムについて説明を聞く機会がありました。

私も感じたことですが、トルコはイスラム国の中ではとても柔軟な国です。女性も素顔を出し、普通のスカートを穿いていますし、街でビールも売っています。前年旅行したヨルダンとは全く違います。しかし、やはりトルコも以前は他のイスラム国と同じく保守的な国で、その当時は女性には恋愛の自由が全くありませんでした。想いを寄せる相手がいても、その人と結ばれる望みは全くなく、想いを伝えることさえできずに他の男と結婚せねばなりません。しかし多くの少女は、愛する人に伝えることができなかつた想いを、かなうことのなかつた願いを、このまま失わせたくない、何とかして形にして残したい、と強く思い、キリムを織り始めたそうです。ベキムは、私にいろいろと説明してくれました。キリムに織り込まれている赤という色は愛を、緑は天国を表している、そして種々の模様にも、祈りや、悲しみなど、様々な意味があるのだ、と。率直に言って、私は感動しました。トルコを離れグルジアに行った後も、ベキムの話が強く印象に残っていたので、復路でトルコに寄った際に、私はベキムの店で赤と黒で可愛い模様の編みであるキリムを一つ買いました。安くはなかつたのですが、良い買い物をしたと思います。

[グルジアの様子]

5日の早朝にグルジアの首都トビリシに着いたのですが、気がついたことを何点か挙げます。

① 女性が美しすぎる

話には聞いていましたが、ホントに凄いです！街を歩いていると10分に一回は一目惚れをしてしまいます。鼻筋が通っているのに、目がとても優しいのです。

② 英語が通じない

ここまで英語が通じない国も珍しいです。首都のトビリシでも、過半数の人は一言たりとも理解できないと思われまふ。その代わりにロシア語はみなさん達者なようでした。私には何の助けにもなりませんでしたが、地下鉄の駅名、バスの停留所名なども全てグルジア文字で書いてあり、アルファベットは全く表記されておられません。(おかげさまで翻字には大分慣れました。)

③ 信仰が篤い

グルジア正教が国教なのですが、国民はみなとても熱心な信者です。生意気なコギャルみたいな連中が、醜い東洋人の私に、追い抜きざまにカタコトの英語でバカにすることを言って笑いながら去って行っても、教会の前にさしかかると立ち止まり、うつむいて胸の辺りで三回十字を切ります。バスが教会の前を通る時は運転手も乗客も全員で十字を切ります。グルジア正教の教えを遵守することが一つの文化として、この国ではとても深いところまで根付いているのだ、と感じることが多かつたです。

④ 貧富の差が激しい

首都トビリシを歩く若者は、みんな日本人と同じかそれ以上にオシャレです。しかしその反面、物乞いをしている人の数が尋常ではありません。片腕や片足のない身体障害者、幼児を連れた母親などが多かつたです。公的なものとして、そのような社会的弱者に対する救済制度が存在しないのではないかと思ひました。ですが、他のヨーロッパのあまり豊かではない国、たとえばクロアチアなどでは、肘から先の無くなつた両腕を突き出しながら、道端で土下座をしている人がいても道行く人は誰も相手にしませんが、グルジアでは、通行人が物乞いをする人とすれ違ふ際にポケットから小銭を探して手渡して

いる光景をかなり頻繁に見ました。おそらくこのような形で、制度化せずとも社会的弱者が生きていけるようなモラルがこの国には存在するのだ、という風に私は解釈しました。そして恐らくそのモラルを支えているのはグルジア正教ではないかと思えます。

⑤ 治安が悪い

治安の悪さについては、昨年旅行された先輩の話や外務省のサイト等から知っていましたが、やはり嘘ではありませんでした。1日目に泊まった宿のおじいさんが、片親がドイツ人でドイツ語が話せる人だったのでアドバイスをくれました。「日が暮れてからは絶対に外に出るな！」と。現地の人も夜間は外出しないそうです。夜、男の集団に刺されたり、リンチされる旅行者が極めて多いという情報は日本で知っていましたが、実際、2日目の夜11時頃、複数の男の大きな笑い声とともに、車か民家のドアを激しく殴打、破壊する音が宿の部屋にいる私のところまで数分間聞こえ、しばらくしてからパトカーが来ていました。夜まで営業している飲食店や24時間オープンな宿などでは、必ず屈強な用心棒が無線機を携えて警備に就いています。私も一度だけ、遠出をしすぎて7時を過ぎても宿に帰還できないことがありましたが、街の雰囲気が昼間とは大きく変わり、女性の姿が全く消えていました。さすがの私もかなりビビり、宿まで走りました。

⑥ がっかりした近代化

都会です。私はもっとカントリーサイドだと思っていました。4車線の通りをかなりの車が間断なく行きかっています。その通りの両側には大きな店が並んでいて、近代的なスーパー、マクドナルド、ネットカフェ、レストランなどがあります。街の人が観光客擦れしていない点が救いでしたが、スーパーではなくバザールで買い物をした私としては、かなり落胆をしました。

[コーカサスのとりこ]

1日目、2日目はトビリシの名所を見て、首都から30キロほど離れたムツヘタという世界遺産の街に65円のバスで行きましたが、特に面白いことは無かったので、割愛。

3日目に、今回の旅のハイライト、コーカサス山脈の中腹にある標高2500mの「カズベキ」という村に行きました。この村は、ロシア及びチェチェン共和国との国境まで、わずか数キロメートル、さらに、グルジアで最もホットな民族問題を抱えている南オセチア共和国領とも至近距離にあります。当然、鉄道などは無く、ソ連軍が敷設した「軍用道路」という道を車で行くことになります。この軍用道路は外務省がレベル3の警告を出しているエリアも少し通らなければなりません、風光明媚なことで有名です。途中にも美しい教会や湖があると知っていたので、直通のバスではなく、寄り道ができるタクシーで行きたいと考えていました。また片道3~4時間かかるので、いくら物価が安いとは言え通常のタクシーでは少し高くつくので、闇タクで行くことに決めていました。

闇タクが集まるディドゥベというエリアに地下鉄で行ったのですが、ここは、市の中心部とは全く異なる世界です。無数の人が無秩序に行き交い、砂埃が舞う中をパンや果物を大声を張り上げながら売る露店があちこちに出ています。グルジアにもこんなところがあったのだ！という嬉しい驚きをもって、私はその光景を眺めていました。何十台と集まっている闇タクの中で、どれにしようか物色していると、「Kazbeki?」と言って一人が話し掛けてきました。「Yah!」と言って筆談で交渉を開始したのですが、片道100ラリ(6500円)でそれ以下は絶対無理だ、というので、さっさとバイバイしました。それを見て、一人の背の高い老人が寄ってきて、今度は彼と交渉することになりました。彼とは30ラリというこちらの予定していた値段で話がまとまったので、彼を雇いました。余談ですが、3~4時間も山道を行くので、100ラリ(6500円)ぐらいは今の私は払っても良い金額なのですが、以前の私のように本当にギリギリの予算で長期の旅行をしている学生バックパッカーにとっては、「日本人相場」ができてしまうのは大変困りものです。そのため、面倒くさくても妥当な値段になるように交渉することは、旅行者として一つの義務だと考えるようにしています。

早速彼の愛車に乗り込みましたが、これがすごい! たぶん、35年は昔の車だろうという、サ

イドミラーが無く、窓も開かない代物です。かなり険しい山道になると聞いていたので、少し不安だったのですが、結果的には、絶景を楽しみながら無事に到着することができました。真つな宿泊施設の無いカズベキ村では、ホームステイ先で少し年上の日本人の男性と初日だけ同じ部屋になりました。彼はシルクロード横断、イスラエルからイラン経由でトルコに抜ける中東黄金コースを制覇しているというかなりの手練で、いろいろと教えてもらいました。イエメンが良いらしいですよ！行きたい……。

カズベキ村は四方をコーカサスの山に囲まれた、まるでナウシカ王女のいる風の谷みたいな村です。眼前にそびえる山々に圧倒されます。スイスのアルプス山麓でもこれほどまでの迫力は無いでしょう。ですがほとんど市場経済が機能していないので、ミネラルウォーターもなく、水道水を飲まなければなりません。確実に山水です。上流の川が決して衛生的ではないことを知っていたので「ピロリ菌ゲットだぜ！」と思いながらも、暑さで水分が必要なので2日間飲み続けました。この村は、すぐ近くの山頂に教会があり、その教会からの景色が素晴らしいことで有名です。ロバや豚や牛が普通に歩いている中を、彼等とともに頂上目指して2時間ほど登りました。教会からは、万年雪を頂くカズベキ山も近くに見え、本当に世界の果てに来たような感じを受けます。風の音しか聞こえず、人間が作ったものが何ひとつ見えない風景で、ノヴァリスの『青い花』の最後の場面を思い出しました。また、夜の星空も今まで見た中で最も美しいもので、天の川を二日とも見られました。

【グルジアのダウンタウン】

カズベキに二泊ホームステイをさせてもらってから、バスで首都のトビリシに帰りました。隣国のアルメニアは現地でビザが取得可能な国なので1日ほど使って足を伸ばそうかとも思っていたのですが、カズベキで一緒になった日本人の方が「アルメニアはあまり面白くない」と仰っていて、トビリシの西北エリアにダウンタウンがある、と教えてくださったので、後半は主にそっちをうろつくつもりでいました。とりあえずトビリシで地下鉄の駅の近くに安宿を見つけた後、16時頃に教えてもらったエリアに行くと、ホントにダウンタウンです！砂埃を上げながら、破れたシャツとサンダル姿の人々がスクランブルに行き交い、賑やかなバザールがいくつもあります。いやあ、これだよ！こういうところに来たかったんだよ！

ウキウキしてるのも程ほどに、朝からほとんど何も食べていなかったのでも、食堂に入りました。トビリシの中心部では、オシャレなレストランはたくさんありましたが、現地の人のための食堂は皆無でした。食堂に入った瞬間、ウェイトレスのおばさん達から怪訝な目で見られました。理由はいくつもあります。真夏の猛暑の中、3日間シャワーを浴びておらず、日に焼けてホコリまみれの顔で、黒いTシャツに汗の跡で白い模様ができているような状態だったので、さすがにダウンタウンの人でも不快感を持ったでしょう。また、本来は外国人が来る場所ではないので、厄介な客が来たと思ったに違いありません。席に着き、案の定、グルジア文字でしか書いていないメニューを見せられて、しかも面のウェイトレスからロシア語で聞かれました。しかし、あらかじめ英語のガイドブックにアルファベットで書いてあった料理名を全てグルジア文字に翻字したメモを用意していたので、これとこれをくれ、と告げると、満足して笑顔でキッチンに帰って行きました。ウェイトレスが去ると、他の客が好奇心をもって眺めてきます。私の前のテーブルに座っていた男性が、ロシア語で話しかけてきてくれたのですが、残念ながら「スパシーバ」しか知らない私は会話ができず、彼がいろいろとコミュニケーションを試みしてくれたにも関わらず、結局スパシーバという言葉だけ言って彼の優しい手と握手することしかできませんでした。彼は残念そうに帰って行きましたが、これ以降、グルジアの食堂に行くと毎回このような経験をしました。どうやら、グルジア人は本当はとても人懐っこい民族のようです。この日に頼んだ食事は、牛の肺、胃、腸、心臓を刻んだ炒め物と、ライスと牛肉を炊き込んだスパイシースープと、パンの盛り合わせとビール大ジョッキです(計約500円)。旅先で飲むビールのおいしいこと！ミックスホルモンもすばらしく、がつがつしていると、少し離れた席の若者が一人、白ワインの入ったグラスを持って私のところへやってきました。「ヒーニャ(中国人)?」と聞いてきたので、違う、と身振りをして「ヤポーニャ(日本人)」と答

えました。向こうは嬉しそうに握手をしてワインのグラスを差し出したので、乾杯をするのだと思い、私もジョッキを持ち上げました。すると相手は、「違う！このワインをお前が飲め！」と身振りで示します。一応ご留意いただきたいのですが、東アジア、中央アジア、東欧などでは、面識の無い人から差し出されたものはどんなことがあっても口にはしてはいけません。睡眠薬が入っており、気がつくとも身包み剥がれて山奥に捨てられている、という手口がとて増えています。この時は、彼は素敵なお彼女をつれており、店の中ということもあったので、私も彼の差し出してくれたワインを一口飲みました。酸がどぎつく効いたあまり美味しいワインではなかったのですが、彼にグラスを返そうとすると、「いや、一気に全部飲み干せ！」と言います。グラスはかなり大きく、もともとワインなんて一気に飲みするものではないのですが、気がつくとも、客も店員も、店中の人全員が私に注目しています。日本人だということと言っちゃったので、日本男児の名誉に関わる問題だ、と思い、立ち上がり生まれて初めてワインの一気に飲みをしました。飲み終わり空のグラスをドン、とテーブルに置くと、何人かが拍手をしてくれました。

そんなこんなで楽しい食事を終えたころは千鳥足になっていたのですが、気にせず何より楽しみにしていたバザールをうろつきに行きました。やっぱりバザールは良いです！喧しくて、不衛生で、いかがわしいのですが、ここは人間の生々しい「生活・人生・生命」、これらの意味を全て包括している「いのち」とでも言うべきものが空間を支配しています。旅をしていると楽しいことばかりではありません。体調の悪い日に新しく治安の悪い街に着いたら、天気は土砂降り、しかも空いている宿がなかなか見つからず 15 キロのバックパックを背負って一人で迷わないといけない時。陸路で国境を越える時に警備軍の腐ったヤローに銃を向けられてパスポートに難癖を付けられ、不当な通行料を要求される時。乗り継ぎに失敗して、駅前の道でホームレス達と一緒にタオルを敷いて寝ないといけない時。こんなことが何度あっても、私たちバックパッカーを旅に駆り立てるのは、美味しい食べ物や酒ではなく、美しい景色や芸術もなく、この「いのち」です。普段の日本では絶対にそのにおいを感じることでできないもの。バザールではこの無数の「いのち」が賑やかに空中を泳ぎまわり、目と耳と鼻から私の全身に入り込み、血の色を変えます。ひと一人とすれ違うことがやっとなというぐらい狭い道を夥しい数の人が行き交い、その両側には地べたにゴザを敷いて、どこからか持ってきた手袋や、動くかどうかかわからない安物の腕時計や目覚し時計、ガラタミみたいな子どものおもちゃ、そんなものを並べて大声を張り上げて商売をしている人たち。「店主」の母親が隣の女性との会話に夢中になっている前で、ホコリで顔が黒ずみ、ボロをまとった5つか6つぐらいの女の子が、屈託のない笑顔で一生懸命に、「いらっしゃいませ！」とでも言っているのでしょうか、通じない言葉で私を呼び止めようとしています。ワインの測り売りをしている屋台では、昼間から酔った男たちが大声で談笑をしていて、私と目が合うとウインクをします。その隣では眠そうにポルノ本を売っている中年夫婦。360度見渡すかぎり、このような光景が続いているのです。普段、私たちは社会的存在として生きていくために止むをえず様々な仮面をつけて生活していますが、ここにいる人は誰もそんなものをつけていません。ユンガーは、日常の中で失った生命感を取り戻せるという点で戦争の存在を肯定しましたが、戦場でなくてもそれは獲得できるということを貴族の彼は知らなかったのでしょうか。冷やかしの続けていると、果物の露店を出しているおばちゃんと目が合いました。当然、言葉はこれっぽっちも通じないのですが、「兄ちゃん、これ買って行きな！」と売りつけてきます。翌日の朝食用にブドウでも買おうかと思うと、1ラリ(65円)だと言います。私は1房65円だと思い、「じゃあくれ！」と言うと、次から次へとビニールにブドウを入れていきます。いや、そんなにいらないんだけど・・・とっていると、どうやら、「1山65円」だったみたいで、結局6～7房買うはめになりました。

【図書館へ・・・】

トビリシの楽しみ方はこれで判明したのですが、私はトビリシにはもう一つ用がありました。そう、図書館です。事前にネットで調べた際には、トビリシ議会図書館と、トビリシ大学図書

館があることがわかっていました。トビリシ議会図書館の方は、グルジア自体がロシアの謀略でちょっと「政治的に微妙な時期」になりつつあったので、訪問するつもりは毛頭ありませんでした（この原稿を書いている2007年11月現在、大規模な反政府活動の勃発で、グルジア全土に非常事態宣言が出されています）。そのため大学図書館にターゲットをしばり、日本で場所も調べていましたが、大学の近くは昼間でも強盗が頻出するエリアだったので、当日はかなり警戒をして行きました。若干迷った末に大学にたどり着いたのですが、治安が悪いからでしょうが、大学の入り口にガードマンが立っています。入ろうとすると、一応キレイな格好をして行ったのですが、明らかに不審な外国人の私は呼び止められて、ロシア語で詰問されました。英語の名刺を見せて、日本から来たライブラリアンだ、と言うと、ライブラリアンの意味はわからなかったのでしょうか、「アポイントはあるのか？」と訊いてきます。無い、と答えると、じゃあ無理だ！と言って相手にしてくれませんでした。言葉を聞き間違えたフリをして、「さんきゅー！」と言って無理に入っていこうとしました。するといきなり腰にさしていた鉄製のトンファーを構えて、殺気を放ちながら前に立ちはだかります。「ヤバイ！」と思い、オッケー、ソーリー！と言って慌てて引き返しました。有無を言わずにアゴを砕かれていてもおかしくないぐらい相手が殺気立っていたので、運が良かったです。少し空気を読み間違えて危険ゾーンに入っていたと気づき、冷や汗をかきながら急いで街に戻りました。

その後は、またダウントウンをぶらついたたりして最終日を迎えました。結局、図書館を訪れることはできませんでしたし、今回は特に危ない時期だったので、他の外国人旅行者ともあまり接触できなかったのですが、グルジアでしか触れられないものにはたくさん出会えたので概ね満足できた旅でした。次の夏季休暇には、ウズベキスタンかインドに行こうと考えています。今から楽しみでしかたありません。是非みなさまも一度、単なる観光ではなく、「旅」に出てみてください。きっと何かが変わりますよ。

さかもと たく (京都大学文学研究科図書館)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2007年度（大図研会計年度2007.07 - 2008.06）に入っておりますので、2007年度の会費の納入をお願い致します。また、2006年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一 まで。